

---

# 古代種の末裔

朝日蓮華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古代種の末裔

### 【Nコード】

N1440A

### 【作者名】

朝日蓮華

### 【あらすじ】

古代種という生まれつき強い魔力を持って生まれてくる種族の末裔である少女アスラは、幼いころ殺された母親の仇をとるため旅立つ……そこで、さまざまな仲間と出会うファンタジー小説。

## 序章

その時彼女は、森の中をひたすら走り続けていた。

母親に手を引かれて．．．

「ねえ、お母さん。私たちがいつまで走らなきゃいけないの？」

幼い少女が母親を見上げてそう言った。その少女の名はアスラ・トーステッドといい、当時六歳だった彼女は、そのとき何が起きているのか全くわかっていなかった。

「もう少しよアスラ．．．もう少し．．．」

母親はそう言うと、アスラの手をきつく握り締めた。走ることをやめずに．．．

「そこまでだ！アスカ・トーステッド！！」

その親子の行く手を阻むかのように、黒いローブを着た男たちが数人．．．アスラたちの前に立ち塞がり、やがて取り囲んでいく。アスカは足を止めると唇を噛んだ。

（ここまでか．．．でもこの子だけは！）

アスカは、アスラを守るように前に立つとその男たちを見つめた。

「大人しく我々に同行すれば、娘は見逃してやろう．．．」

「．．．わかりました。でも、これだけは約束してください．．．今すぐこの子を逃がすこと．．．そして、これ以上巻き込まないであげて．．．お願いです。」

「いいだろう．．．最後に娘に言い残すことはないか？」

黒ローブの男の一人がそう言うと、アスラを指し示した。

「アスラ．．．お母さん、少しだけこの人達とお話があるの。先行つてくれる？」

アスカは、アスラの前で身をかがめると彼女の肩に優しく手を置くと穏やかな表情と声でそう言った。幼い彼女を不安にさせないためだ。

「いや！お母さんと一緒じゃないとー！」

「すぐ行くから．．．ね？」

優しくアスラの頭をなでると、アスカはそう言った。

「わかった．．．」

「いい子ね。それから．．．絶対に立ち止まったり、振り向いたりしてはだめよ？ただ走りなさい．．．わかった？」

「うん．．．」

しばらくして、アスラは戸惑っていたがすぐに走り去って行った。立ち止まらず、振り向かずにただひたすら走り続けていた。しかし、

この時彼女は気づいていた・・・二度と母親と会うことが出来ないことを・・・それでも立ち止まらずに走り続けた。

「絶対に仇を討つから・・・いつか必ず・・・」

わずか六歳の少女は、そのときそう決意した。それから、十年の月日が経った・・・

## 序章（後書き）

初めての投稿です。この話はずっと昔に書いたものなので、結構読みにくいかもしれませんが、それでも最後まで読んでいただけたらうれしく思います。

## 第二話

ある朝のことであった。緑豊かな村プレーリルからわずかに離れた所にある森、その中から一人の少女のため息が聞こえてきた。

「はあゝ．．．何でこんなことに．．．」

腰まで伸ばした金の真つ直ぐとした髪、そして深い紫色の瞳をした少女だ。名はアスラ・トーステッドと言う。彼女は十年前、この森で倒れていたところを運良く偶然通りがかった夫婦によって助けられ、育てられたのだ。子宝に恵まれなかったその夫婦は、彼女の事を天からの授かり者だといって大切に、深い愛情を持って育てたのだが．．．いつまでもそうしているわけにはいかなかった、彼女にとつて大切な目的を果たすために。そして、今さつき泣く泣くその夫婦や、村の人たちに暖かく送り出され旅立ったのだが、不運にもあの黒ローブの男達に出会ってしまったのだった。

「わあ．．．なんか最近やたらと多くなっただんだよねえゝ。なんでだろう？」

アスラは森の茂みに身を隠しながら、彼女の姿を探している黒ローブの男達の様子をそつと見ながらつぶやいた。十年前、プレーリルの村に来て暮らすようになってからしばらく黒ローブの男達は彼女の前に姿を現さなかったのだが、十五になってから急に現れたのだ。母との約束が守られているのだと信じていたというのに．．．母は命と引き換えに彼女の命を守ったのだ。それなのに今更現れて、約束を破るとは．．．そう思うとなんだか腹立たしかった。

（それにしても今回はがんばるなあゝ．．．でもいつまでもこうしているわけにはいかないし．．．）

何かを決意すると、アスラは茂みから立ち上がると手を真上にかざした。そして、瞳を閉じじつと立ち尽くす。彼女は古代種．．．生まれつき強い魔力を持ち、心で精霊などに呼びかけて力を借りることができるとしている特殊な種族の生き残りなのだ。

(風の精霊さん．．．力を貸して．．．)

アスラは心でそう精霊に呼びかける．．．すると．．．黒ローブの男達の周りに突風が巻き起こる。

それは土埃を上げ、草木を激しく揺らした。無論、急に起こった突風の嵐に囲まれた彼らはなす術もなくただそれに動揺していた。その隙をついて、彼女は再び奥へと走り去った。

「ごめんなさい．．．」

アスラは突風の嵐によって吹き飛ばされて行く様子をちらりと見ると小さくそう誤った。少しやりすぎたかもしれない．．．そう思ったのだろう。

「あゝ．．．でもこれからどうしよう？仇をとるって決めたのはいいけど．．．私あの人達について何も知らないし。こんなことならちゃんと聞いてくればよかった．．．さっきの人達に。」

黒ローブの男達の気配もなくなったので、アスラは川辺で一休みしていた。勢い良く旅立つてきたのだが、敵の情報も全く知らないままと言うのはあまりにも無謀であった。そのことに今になって彼女は要約自覚し始めたのだ．．．遅すぎるが。

「トレクさん、ミレルさん．．．私これから自信ないよ．．．」

旅だつて早々、アスラは挫折と疲労を感じ地面に寝転んで目を閉じた．．．トレクとミレルというのは、彼女を助けてくれたあの夫婦のことである。いつも元気で若々しいミレル、そして穏やかで優しいトレク．．．二人とも本当に可愛がってくれた．．．彼女は感謝してもし尽くせない程の思いがあつた．．．そして本当に二人とも大好きであつた。懐かしく思いながら、彼女は深い眠りへと入った。

「村を出るですって!？」

アスラが旅立つことを二人に話したのは、今から三日前のことだ。急にそんなことを言われたミレルは、驚きのあまり声が上がってしまっていた。

「アスラ．．．私達はあなたのことを本当に愛しているのよ?だから

ら、気にしなくていいの。それとも誰かに何か言われたの？」

ミレルはアスラの肩に優しく手を置くと、美しい顔を曇らせた。彼女は四十前後だと言つのにいまだ若々しく美しい．．．肌には艶と張りがあり、いかにも健康で活発そうだ。アスラはそんな彼女の笑顔が大好きであつた。それを見るとどんなに落ち込んでいてもすぐに立ち直ってしまうから．．．

「違うよ。村の人達はそんなこと一度も言つたことない。」

「じゃあ、何か気を使っているの？そんな必要はないってあの時言つたはずよ？」

「違う．．．」

「じゃあどうして？理由をちゃんと言いなさい。」

ミレルは腰に手を当ててそう言つた。彼女は普段優しいが、厳しくもある。

「ミレル。そんなに一方的にアスラに質問するのは良くないぞ。」

「でも！」

アスラは床に目をやり、ただ黙っていた。そんな彼女に、トレクは目をやると．．．

「私．．．いろいろな場所を見てみたい。世界を知って事はそんなにいけないことなの？」

「．．．本当にそうか？」

「そうだよ．．．だからお願い！気が済んだら戻ってくるから！！お土産も買ってくるし！」

「いや．．．そういう問題じゃ．．．」

アスラは、二人に頭を下げると必死でそう言つた。正直に言うわけにはいかない．．．言つたらきつと反対されるだろう。けれどこれは昔から自分で決めていたことなのだ。だから誰になんとかわれようと、彼女はそれを実行するつもりだつた。

「わかつたわよ．．．気が済むまで行ってらっしゃい。」

ミレルはため息をつくと、呆れたようにそう言つた。アスラの性格は良く知っている．．．一度決めたことは何かなんであるうと譲

らないし、絶対にあきらめない。

「ちゃんと帰ってくるのよ?」

「うん!」

アスラは顔を上げると満面の笑みを浮かべた。その様子を見て、トレクも苦笑をした。

「お前の性格は父親譲りだな・・・」

トレクはそう言うと、はっと口を噤んだ。言うてはいけない事をつい口走ってしまった・・・ごまかそうにももう遅い。

「お父さんのこと・・・知ってるの?トレクさん!」

「ま・・・まあな。さあ、それより旅立つには準備が・・・」

「教えて!お父さんは今どこにいるの!?生きてるの?会ったことがあるんでしょう!」

「・・・それは教えることが出来ない。」

「どうして!」

「旅立てばわかる・・・いつかきくと。」

トレクは悲しそうな笑みを浮かべると、アスラの肩を叩いて促した。それっきり、彼女も父親のことを尋ねることはなかった。なぜか、それ以上聞いてはいけないような気がして・・・

「君!」

心地の良い眠りの中、アスラは誰かに揺さぶられるのを感じた。

懐かしい夢を見て頭がぼんやりとしていたが、彼女はゆっくりと瞳を開いた。

「大丈夫?もしかして怪我でもしているのか?」

「へ?」

アスラはぼんやりとして、まだ視界がはっきりとしていなかった。その相手の顔をうまく見ることが出来なかった。ただ、それは優しく穏やかで、それでいて品のある男の声であることは理解した。今は何か勘違いして心配しているようだ。

「えっと・・・あの・・・」

アスラは視界をはつきりさせるため目を擦ると、再び相手の顔を見た．．．そして、言葉を失ってしまった。

（綺麗な人．．．女の子？いや．．．でも声が違うし．．．それに良く見れば男の人っぽいような．．．）

アスラを心配して覗き込んでいるのは、マリンプルの瞳に金髪の肩まで伸びた髪を一つに結った品のある優しげな少年であった。その容貌は美女のように美しく、女に間違えても無理はなかった。が、背丈は結構高いようだ。年のころは彼女とさほど変わらないだろう．．．

アスラはなぜこのような状態に自分がなっているのか全く理解できていなかった。つい敵から逃れ安心して眠ってしまったのは覚えていいる．．．しかし、なぜこの美少年に心配されているのだろうか？

「あなたは一体．．．」

アスラはようやくはつきりとしてきた意識の中、何とか声を出してそう聞いた。すると、その美少年は彼女が無事だということを確信し安心したのか、笑顔でこう言った。

「ああ、僕はクレイン・ヴィンセント。良かった、怪我はないみたいだね？」

「怪我？私はただここで寝ていただけで．．．ああ！？すみません．．．急いでいたのに私がここで寝ていたから邪魔だったよね？ごめんなさい！でもつい安心しちゃって．．．」

アスラは勝手にそう解釈すると、慌てて起き上がるとクレインに頭を下げた。彼はきよんととして、そんな姿を見ていたが．．．やがて笑い出したのだ。

「ああ、そうだったのか？僕はてっきり君が気を失っているんじゃないかって思ってしまったて．．．」

「ええ！？そうだったの？」

アスラもつられてそう言うのと笑い出した。そして、しばらくして自分がまだ名乗っていないことを思い出した。

「私、アスラ・トーステッド。なんだか足止めさせちゃってごめん

なさい。」

「そんなこと．．．僕もせつかく昼寝をしていたところを起こしてしまつたみたいで．．．」

クレインが申し訳なさそうにそう言うと、アスラは忘れかけていたことを思い出した。

「あ！私すっかり忘れてた！！」

「何を？」

急にアスラが大きな声でそう言ったので、クレインは驚いた。さつきまでずっと黒ローブの男達に追われていたのだ．．．一体どれほどここで眠っていたのだろうか？それほど時間がたっていないとなれば、まだ彼らがここにいるという可能性は高い。彼女はちらつと彼の背後に目を凝らし様子を伺った。

（大丈夫かなあ．．．）

不安な面持ちでアスラはそう心の中でつぶやくと、クレインは不思議そうに見つめた。

「何かあったのか？」

「うん．．．実はさつきまで黒ローブの人達に追われてて．．．」

「黒ローブ？」

アスラはつい口を滑らせてそんなことを言ってしまったのだ。まだ信用して良いかもわからない出会ったばかりのその少年に対して

### 第三部

アスラは戸惑っていた。目の前の美少年、クレインに黒ローブの男達に追われていると言ったことをとっさに口走ってしまったのだから

「え．．．っと、その．．．」

「君は．．．アスラは何者かに追われているのか？その、さっき言っていた黒ローブの男達に．．．」

アスラが曖昧な様子で何を言っているのか考えているのが気になったのか、クレインはそう尋ねた。

「うん．．．あ、でも本当になんで追ってくるのかな？ちよっと不思議で．．．」

「なぜって、それは君が古代種だからだよ？彼らは昔から強い魔力を持つ古代種の力を求めていたんだ．．．その力を得る事によってより強力な魔力が手に入るからね。」

「強力な魔力．．．そういえば、何で私が古代種だってわかったの？」

アスラは不思議に思いそう言うと、クレインは目を丸くして彼女のむき出しになった右腕を指し示した。そこには肩から手首にかけて長い刺青が刻まれている．．．

「それを見ればすぐにわかるよ。古代種特有の習性である特殊な刺青．．．今はもう絶滅してしまったと聞いていたけど、生き残っていたなんて．．．」

古代種は生まれつき強い魔力を持ち、心で直接精霊等に呼びかけ力を借りる事ができるといわれている。そして、右腕の長い刺青はその刻む人を守る言霊．．．古代種独特な文字を刻む事によって生涯幸せになれるようにという願いが込められたものだ。

「アスラの両親は？」

「え．．．私の両親は．．．」

アスラはそういわれると、十年前の事を思い出し顔を曇らせた。  
母親はあの後殺されたのだろう。そして、幼いころに旅立ったま  
まの父親もきつと……

「殺されたの……さっきの黒ローブの男達によって……」

「……ハーバルと名乗る男じゃなかったか？アスラの母親を殺し  
た黒ローブの男は……」

「え？名乗っていなかったからわからないけど……その人が何か  
？」

「殺されたんだ……僕の母も……その黒ローブの男、ハーバル  
によってね。」

クレインは手をきつく握ると、怒りを押し殺した……

「母上は……ハーバルによって操られていた父上に殺されたんだ。  
今思えば……あの時から既にあの男は計画していたのかもしれない  
……」

アスラは、クレインのマリンブルーの優しげな瞳が一瞬、怒りに  
染まったのを見たような気がした。

「アスラは……セイントダイアルを知っているか？」

「それくらいは……確かすごく綺麗で活気がある大きな都だって  
聞いた。村のおじさんが行ったとき話してくれたの……」

「そう……前はそうだった……けど、今は全く違ってしまっ  
た。今から二ヶ月くらい前……あの男がいきなり現れたんだ。」

クレインはゆっくりとそう語り始め、言葉を切った……そして、  
しばらくすると口を開いた。

「ハーバルは、城に滞在したいと言った……僕や母上は反対した  
んだ。けど、父上は様子を見てみると言っただけであの男の滞在を許可し  
た……そして母上は知ってしまったんだ。ハーバルが何者なのか  
を……何が目的なのかも……」

アスラは黙って続きを待った。何を話して言いか全くわからな  
かったのだ……

「データータス……破壊と混沌を祈る闇の教団……いや、組織とい

った方が正しい．．．」

この世界には各国所々に神を祭る習性があった。例えば、豊穡の女神であるラティアや平和の神ダグダそんなところが有名だ。それぞれ豊穡や平和を祈るために祭つてあるのだが．．．闇や破壊、ましてや混沌などもつてのほかである。

「ハーバルはじゃあ．．．私のお母さんを殺した本人なの？」

再び脳裏によぎったのは、黒ローブの男達に囲まれた時の事であった．．．一人、確か不気味で恐ろしい雰囲気の方がいたかもしれない。アスラは、その男を見てその時怖いと．．．はつきりとそう思ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1440a/>

---

古代種の未裔

2010年10月12日14時09分発行